

---

# ある旅人達の呟き

雪兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある旅人達の眩き

### 【Nコード】

N7306M

### 【作者名】

雪兎

### 【あらすじ】

竜や魔女、奇妙な生き物が生息する世界

その端に独裁政治の続く灰色の国

その北に面した湖畔に互いに互いの目的も過去も知らない妙な男女がいた。  
彼らの歪んだ心、朽ち果てた身体、薄汚れた想いを包むのは、妙な男の妙な眩き

## 1 夜の湖畔にて（前書き）

初投稿です。

いろいろと未熟なところがありますが、生温かい目で見てください

## 1 夜の湖畔にて

「過去と未来。光と影。虚言と真言。自己と他者。僕らは常に多少の誤差や変化

はあれどそのようなくつもの数直線の交点にいる。それらは全て二者択一で、

まあ言ってみれば世界は多面的で、非透過的で、漂流的で平等だ。だからこそ世

界は素晴らしく非情だと言っている。つまり戦争してようが殺戮してようが撲滅

虐殺拷問独裁窃盗肅正苦難監禁離別放火発狂絶望苦痛嫉妬狂気慟哭失恋敗北嘘偽

がありふれていようがいまいが、世界は万人に平等の光や空気、清々しい青空と

風、発見と進化及び退化、そして生死を提供してくれる。まあそれを善きことそ

う考えない人も少くないけど。とはいえ、そう考えると人間ってのは本当にち

っぽけだよ。どれ一つ満足に操作なんかできないっていうか、できてはいけな

いというのに自らが世界の覇者だと喚き続けている。同じ失敗を繰り返すわ同族

殺しを進んでやるよう上が指示するわ、浅ましいとしかいいようがない。それ故

神は人の形なんかではなく世界の形をしているってのが、僕の持論なんだが。君

はどうだい？」

「・・・おい、<sup>クキラ</sup>狗綺羅。また隊長が独りでヌイグルミ相手に論議になっ

てない論議やってるぞ。・・・真面目に大丈夫かコレ？」

「知らないよ。どうでもいいし。こんなの気にする暇あるなら早く勉強してその

大して役に立たない召喚術を人並みにしろ。この、うりゃ」

「ひでえ。・・・うぐっ、分かった！分かったから痛痛いって！脛蹴るなブーツで

分かったから！痛っ」

「二人とも煩いなあ。少しは彼女、レンツェクレル力を見習って静かにして下さ

い。・・・それでね、愛しき娘、私が思うに神は幼子のように人間という玩具

に飽きてしまった場合、もしくは賢者のように人間という愚かさを見捨ててしま

った場合、世界はまた原子分子の粒となり再生を繰り返すと思うんだ。だからも

し、まあありえないけど、人間が平和を永久に手に入ってしまったり、大戦が再

来してしまつたら、神はこの世を滅ぼす・・・かもね。だからと言つて何の意味

もないんだろうけど。・・・あ、別の観点からいって、どつかの宗教みたく一人

の聖人が現れてこの世が救われるならどうだろう。恐らくかなり短期間の間だろ

うが、俗に言う”平和”とやらが訪れる。と、大衆は歓喜するだろう。中身が真の

平和かどうかは別として、だけど。それはともかく、そうなるのが正しい理なの

だとしたら、世界と神は、彼もしくは彼女以外の生命を必要としていないといえ

ると思うんだ。なぜならどんなに短期間といえどその時の世界は他

のどんな生命

も無価値となり果て、そ

の勇者とやらの操り糸に引かれることになる。国単位でさえ何かを敵としてなら

んだ状態でないと団結なんてありえないのに、そこまで巨大なものを操れるよう

に生命はできていないけどね。まあともかく、結局その世界の寿命はその人の寿

命と等しくたつた数十年で終わることになる。逆に言えばその聖人が不老不死で

ないと仮定した場合においてのみではあるが、この世界に主人公はいないと言え

るんじゃない？でも・・・んーやっぱこれはありきたり？典型的なその場凌ぎの

ハッピーエンドだもん。ねえ・・・って。レンツエクレル力は内気すぎていけ

ない。自分の意見はちゃんと持たなきゃね。狗綺羅ちゃんはどう思う？

「は？私に振られても・・・取り敢えず世界には害虫が多すぎるっ。てい！」

「だから止めてえ俺が何したいっ…！おま……変にツボやら急所やらを的確にいう

えぐえああ！」  
暗く静かな大森林の泉の畔に、俺たちはいた。

まずいないだろうが今の俺たちを目撃した奴がいるなら、こんな深夜に薪も寝床

も用意せず、月明かりと俺たちの周りをうろつく鬼火の青い炎だけを頼りに会話

と夕飯の片付けをする俺たちはなかなか以て異様なものだと思うだろう。

俺の真つ正面で大きな赤毛の猫のぬいぐるみと向かい合いブツブツ  
呟いているの

は、見た目はそこら辺にいそうな優男だが中身がちょっと、という  
か、結構アレ

な感じの（くじ引きで決定した）隊長の祠。

不思議の国の住民のウサギが持つてそんな大きく豪華な懐中時計を  
首からぶら下

げている、顔はかなり綺麗だが、口と共に手も出る色んな意味で未  
恐ろしい少女

の狗綺羅。

今祠の膝に頭を置いて熟睡している、なんちゃって少女のミアも  
狗綺羅とは別  
の意味で恐い。

そして多分この中で一番まともな俺。決してMじゃないし無能でも  
ないまともな俺

。  
アスナロ  
。 翌檜

……今更ながら個性的すぎる。

ついでに足腰が痛いですいい加減痛い勘弁して痛いたいなんか目  
覚めそうで痛  
い。

「さすがに暗いなあ……そろそろ順番に寝よつか？私起きとく  
から」

俺を蹴り疲れたのか単に反応に飽きたのか、狗綺羅が首を鳴らし、  
気だるげに伸  
びし、襟首つかんで俺を捨てる痛っ。

ひどいです。

「うん了解。その2時間後は僕が引き受けるよ。ところで睡眠とい  
えば思うこと

がある。その一つは生命が睡眠という人生の中の休息をなくした場

合なんだが、

活動できる人生がより長くなることによって生命が得られる若しくは失うものっ

てなんだろね？僕が考えるに、睡眠によって日々の生活における内容の整理をおく

おくにやああ！？」

「はい黙れこの論弁男。誰もそんな意味ない妄想求めてないから。聞かん子はそ

の瞳孔開いたヤバ気な化けネコ取り上げますよ？」

「痛い痛い痛いや痛いやっ！！取らんとして殴らんとして！！この子と私が何したって

言うの痛いです！うぐぼあ逃げてレンツェクレルカ！早く！僕がなんとかしてやめて

時間稼ぐからマジで痛い早く光速の音速倍の速さで光年先に逃げて許してええ！！

┌

「あ もう。ウザいしイタイし意味分かんないし。何頑張ってるの。微妙に又イ

グルミの名前変わってるのもいちいち癩に触る。…って、うわっ！？分かった分か

ったから泣かないの。そんなもの取らないから必死に匿うなっ。そこまで強く殴

ってないでしょ。しかも一発食らわせたただけだし。とにかく、ミィアと一つの布

団でいいよね。はいおやすみ」

狗綺羅が強制的に仕切り、涙目の隊長を無理矢理寝かし付ける。

痛みに倒れたままの俺にも布団を投げ寄せ、彼女は静かに大木に体を寄せてし

やがみこんみ、無造作に指を鳴らす。一瞬にして鬼火が消え、辺りは平穏な月明

かりを取り戻した。  
暫く祠の愚痴が細々と聞こえたが、意味ありげに狗綺羅が咳をする  
と慌てて押し  
黙る。

久しぶりの沈黙

俺は幾分か冷えた体に毛布を巻き付け、また明日に備えて体を休め  
た。

## 1 夜の湖畔にて（後書き）

隊長の台詞のところが一番楽しいです  
毎日の私の妄想まんまですが

妙な奴だな、でも暇つぶしにはなったか、と思っていたら幸いです。

読んでくださりありがとうございました。

もしまた機会があれば、つづきもご消費ください。

## 2 少女の追想

湖畔を挟んで四方に広がる山々から光が立ち込め、湖や森を満たし始めた。

金色の幾重にもなる生糸のような光が纏わり付く気がして、私は首を振る。

このような情景を美しいと言うのだと、隊長が教えてくれた。

だが私は夜明けが嫌いだ。

昔閉じ込められてた牢が東の端にあったから、あれは私に昔を思い出させる。

今日だって見るつもりなんかなかった。

だから最初に番をしてあげたというのに、ニーナを起こそうとしたら暴れられた

と、青痣と涙で目茶苦茶になった隊長から叩き起こされた。

降り注ぐ朝日の木漏れ日。

それは硝子と鉄格子から抜ける、腹立たしいほど澄み切った光。全てを包む優しい輝き。

また今日が始まり、また昨日と同じ苦痛が始まる事を優しくせせ笑いながら示す光。

目覚めを誘う暖かさ。

私の心を暖める事なく消えていった光。憎く痛いまばゆさ。

私には重過ぎる。

しかしあの時、あの瞬間私は光を求めた。  
あの人に笑われても、神さまを信じて祈った。

今この現状が神さまに願いを聞き入れて貰ったためなのかどうかは  
分からない。

隊長は神さまなんて信じていないみたいだし、ニーナや翌檜は興味  
すらないよう  
だ。

だが、今でも私は尊過ぎるものが存在すると信じる。

特にあの時の私にはそれだけが、あの小さな窓から降りてくる光だ  
けが神さまだ  
った。

求める世界の破片だった。

助けて……

許して……

鎖が絡まった腕が虚空に伸ばされる。

触れるか、触れられないかの瀬戸際で、鎖はピンと伸びて前に進ま  
せてくれなく  
なる。

神さまは近付いてくることなく、この鎖のように私を苦しめる。

彼が彼女か分からないその方は、輝く柱の姿で笑っていた。

何故か涙が溢れる。

身体の節々が痛い。

塞がり欠けていた傷口が開くのが分かる。

心が朽ち果てる音がする。

それでも手を伸ばす。

暖かい日だまりをこの指先に浴びたい。

あの日の幸せを思い出したい。

笑顔を忘れたくない。

身を乗り出す。

口から意味不明な声が漏れる。

指先が神さまを掠る。

もう少し・・・

もう少しで・・・

だけど突然、私の身体は大きくて白い手に捕らえられる。

引き離される私。

遠退く神さま。

私を迎えるのは、月のように冷たいあの人。

光を持たないあの人。

彼は静かに笑い、私をゆっくりと闇引きずり込む。

私は何も言わない。

神さまはどこまでも神さまなんだな、なんて妙に納得していた。

一筋のか細い光から目を離せない私が気に食わなかったのか、それともただの趣

味なのか、彼は私から外気を切り離すように包み込んだ。

目隠しのつもりか、私の両目を片手で覆う。

見飽きた闇。

感じ飽きた絶望。

抱き飽きた虚無。

私は何も言わない。

彼は動かない私に満足したらしくまた笑い、分かっているくせに耳元で囁いた。

「何、してるの？」

「……え？」

背後からの声が、重なる。

身体が飛び上がり、大量の汗が吹き出る。

怖い怖いどうしよう怖い

肩を捕まれる。

「い……い……いやああああああああ!!」

捕まれた肩を払うことも出来ず崩れ落ちる。

足腰が立たない。首が立たない。死ぬ嫌怖い私死ぬ怖い!?

「ちよ……狗綺羅!?大丈夫か!？」

はっとして見上げると、見慣れた男が不景気そうな顔で突っ立っていた。

「あ……アス……翌檜……?」

私は汗が滝のように流れていた。

頭中が急速に冷えていく。

そして何も出来ない新米剣士のくせに、変なタイミングだけはいいこいつに腹が

たった。

凄く不愉快。

右手で拳を作り、私を支えようとしてしゃがんで近づいてきた奴のデコを殴る。

クリーンヒット。

ぐぼあっ、とかいう奇声と共に翌檜が倒れ、額に手を当てて悶絶する。

キャリアに差はあるとはいえ、後衛の私の攻撃がここまで当たって

しまつて事

は、やっぱりこいつは被虐待嗜好だったりするのだろうか。

「痛痛いって！何今の痛いこれって照れ隠しぬ？！可愛くないよ痛い！？」

「黙れやこのすつとこどつこい。しかも何見てんだこん畜生。全て消しなさい。」

今の記憶とその脳に入ってる魂ごと消し飛びなさい」

「やめ・・・いつ・・・あ・・・なんか目覚める目覚めあつても痛いぐつはああ

あ！？」

「なんでいるの？なんで見てるの？何したいの？馬鹿過ぎない？死にたいわけ？」

「待って・・・俺はその・・・た・・・隊長に呼ばただけで・・・うわあ

ごめ・・・って・・・狗綺羅・・・？泣いて・・・た・・・のか？」

振り上げた拳が止まる。

思わず泉を振り返ると、目元を赤くした餓鬼のような醜い顔が私を見つめ・・・

「・・・っ！？馬鹿！」

拳をどうすることも出来ずに下ろし、そのまま翌檜とは反対方向に駆け出そうと

足を踏み出した。

「煩いよ・・・なあに、またアスナ口が何もないとこで転んだの？ダメダメだねえ」

翌檜の背後から、ニーナが大きめの寝着を引きずりながら目を擦りやってくる。

ピッタリのサイズの寝着があるにも関わらず、「もえねらい〜」と  
か言ってそん  
なだらし無い恰好をしている彼女と私が仲良しのはずがなく、こん  
な顔を見せる  
つもりもない。

「なんでもない。さっさと着替えなさい」  
動揺を隠し、朝食を用意するため、縫いぐるみを抱いて二度寝にか  
かっている隊  
長の元に向かった。

## 2 少女の追想（後書き）

そういえば最近、コロッケを食べていない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7306m/>

---

ある旅人達の呟き

2011年10月7日15時28分発行